活経験に乏しく、「自分たちの世界」のみにとじこもりがちであるので、同年齢の健常児の実態を知り、視野を広めるためである。

② 内容

ア 中学部の生徒約五十名が「少年自然の家」で、大信村立大信中生徒と一泊二日の交流行事を実施。

イ 研修活動は、生徒同士の触れ合いを多くし、すべて両校一緒に実施。

ウ 活動全体を通しての相互理解と交友関係の樹立。

(3) 高等部「生徒会活動を通しての自立」

① 本校生にとっての生徒会活動の意義は、将来への不安を除き自信を持たせること、また組織の一員としての自覚を高めるものである。

② 内容

ア 生徒会行事の実践を通し、自己の立場と任務を知る。

イ 交流では、準備、打ち合わせなどから、まとまりの大切さを知る。

③ 結果と今後の努力点

ア 校内行事は、何回も経験しており、マンネリ化する傾向にあるので、工夫が必要である。

イ 他校生との接触により、自己反省する面が多かったので、それらを今後の指導に生かしたい。

小学部 —送別会—

小学部—交通安全教室—

五 まとめ

本校の教育の方針は、児童生徒の障害の改善、機能の向上をめざしながら、生活に希望を与え、社会の一員として自立できる人間を育成することであり、生徒指導を充実し、社会人として生活できる人間の形成に寄与したい。

一年間の指導記録から

県立富岡養護学校教諭
佐久間 光 弘

本校は、昭和五十三年度から県立養護学校（精神薄弱）として発足し、三年目を迎えた。今まで、生徒指導については、各担当教師の工夫と努力に任せてきた傾向がある。しかし、心身障害児の生徒指導には、一般の学校とは視点を変えたあり方や取り組み方が必要である。

ここでは、K・A児を通しての生徒指導のあり方について述べることにする。

対象児 K・A（女児）

昭和四十二年九月三十日生。知能検査測定不能。高度難聴児。抗てんかん薬服用。表出言語はほとんどない。身体は、健常児より大きく、生理がある。握力は強い。

生徒指導の原則は、個の理解であるとは周知のことである。K・A児の指導については、観察、行動の記録を手がかりにする以外有効な手段はみあたらなかった。昨年の四月以来、毎日の行動、態度、反応等の特記事項を記入する方法で記録してきた。

○ 朝の会のような集会活動中にきげんが悪くなると、足をバタつかせたり、近くの女児の髪をひっぱったり、両手をかぎ型にしたまま、くるくるまわったりする。

○ トランポリンやスクーターのようなものを好む。また、しゃぼん玉を作ったり、とばしたりする。

○ キャッチボールができる。モップで室内を掃くこともできる。

これらの観察から、彼女の行動の状況を次のように分析してみた。

1 情緒が不安定になるのは

(1) 気温、湿度が高いとき

(2) 周囲が騒々しいとき

(3) 友達などに、からかわれたとき

(4) いやなことを強制させられたとき

2 喜んだり、笑ったりするのは

(1) 座席をうしろにそらせ、ガタガタ前後にゆれ動かしているとき

(2) トランポリンやスクーターで遊んでいるとき

(3) 弁当を食べたり、食べおわったときに教師の弁当をのぞきこむとき

(4) 背中合わせで、シーソーをしてやるときや両足を持ってやり、腕で前へ進むとき

その他、各種の能力や学習活動あるいは、生活習慣など考え合わせた結